



和歌書法秘傳
持明院少院

種別
イ4
696
213





如孝
玉泉文庫



14
696
213

入道相傳之事



一入道乃ハ筆法ニ并書法式乃題名也
初院方御書基時乃作云入道乃ハ
乃書ハ法性入道友能書ヤク
由リクモ入道乃の妙也
扇より作りて進まらぬ
甲此妙し侍りて
心中に於て其侍りて
のわたりて書法ハ
ハ書と御り表りし
けらと也是より入道乃ハト作也

社云
伊行作

世より定信妙と
本乃トヤシ

一 一州一人世をたすもの徳とあるは
 此世より一五丁後一けるや世
 考るゆ申の入申傳受の誓紙へに
 其の徳のありきと申すは西遊徳
 祿名院之先院又申院通行鳥丸先廣
 如く二条家初等の人其誓紙に
 不問も不問も高き一車高家の徳
 徳と一りきと事白流也親王たる
 以上高徳を師とす

一 其の院基久の豊后高村王孫者
 下右後礼の時徳地と申すは
 一 入申の徳後と申すは 養國
 と申すは曼珠院主良忠法親王と申す
 徳と申すは徳と申すは 徳と申すは
慶長二十年

一 其れは其後故大西之基定卿を
 不問のち後と申すは徳と申すは
 其れは其の徳後と申すは 徳と申すは
 下右後礼のり入申の徳と申すは
 徳と申すは

一 入申の権頂と申すは 徳と申すは
 初使わくは権頂と申すは 徳と申すは
 徳と申すは 徳と申すは
 徳と申すは 徳と申すは
 徳と申すは 徳と申すは

七箇大事

一 一キススキノ
 徳紀主基屏風

大嘗會ノ
 キススキノト多岐のキスス
 徳ノ屏風ノ其形モ各別ニ
 徳ノ上被傳板也元々大嘗會ノ屏風ノ其形ヨリ
 出スル故也 本朝文粹ニ徳ノ屏風ニ云々云々
 七箇書收買聖之障子ノ大嘗會ノ之ニ在リ
 兩度贖ニ書國ニ
 三并凡

ぢまきし私事とせしむるべし

懐紙の事

一懐紙の厚さ約三寸は好む也

一懐紙の調子、懐紙と云ひしは大井
あつた事

天子の一人と云ふは但大さ懐紙は所
とわらひさしれ一人守余守るを
大井下といふ事候と二人云すり
用とて位高位の殿と二人二人
用とて地下の二人一人一寸をいふ
七八分と云ふ幅はつれと申さの
まゝに但何事り度なれはかたに
るより何り但守者の御用は必三人
二人がきし申すと云ふ候とて

後官の人と云ふは侍れも暗の
時必三つと云ふ法も調と

一地下の人と云ふは長より短は
くまゝに所いしと云ふは
あるは但わらひしは但懐紙
しめと云ふは所を懐紙と
するの候候と云ふは懐紙の人と云
ふ世中此調子にたふしと云
ふは是と云ふは

詠河上春月

和歌

頓阿

賀ききりし神は神

らうに思ふ月をの原

さるも志をきりし神

波之姫

一 詠作紙の端より字はほとりて

ちかき夜にこそ事なほよみはかりきた

はわらひあつて書きたるは同じに侍

一 詠作のよみはたしつゝもよみしよ

つそこのとてすなはてしきりし

とてしきりし書きたるは同じに侍

人のよみはたしつゝもよみしよ

詠作のよみはたしつゝもよみしよ

詠作のよみはたしつゝもよみしよ

詠作のよみはたしつゝもよみしよ

詠作のよみはたしつゝもよみしよ

詠作のよみはたしつゝもよみしよ

詠作のよみはたしつゝもよみしよ

詠作のよみはたしつゝもよみしよ

一季書の年一春日秋日や一季書
 又後後こ父母存中の人がいふを就
 と後一季書と書くる故に是も
 旧唐と後唐の中人師匠やその
 今にまはるる常いそよとまはるる
 法中いふれたもまよひしす

一用の字々の各歌よ一季書通歌
 一季書又の関白殿の懐かき季書は
 一季書又の関白殿の懐かき季書は

春日同詠早春霞
 和歌

一夏日秋日冬日無何也
 一季目のを詠作の奇と此と年書
 一季目一季目ちよハ詠の字を奇
 此字はハ中字をとりて詠を作り
 一句題外の文字数多きハ和奇と
 一季目のと詠の文字と字まてハ
 一季目のと詠の文字と字まてハ
 又一字いとし一文字を熟字ハ切
 為らん

夏日同詠行詠聽
 郭と和歌

夏日同詠行詠
 聽郭と和歌
 一季目の又和歌は詠と字は三

冬日同詠一鳥詠
 寒水和歌

一 季の書の手 春日 秋日はと書
 又 後作は父母存すの人のたはるを
 を後とて季の書より故に遠く
 旧作とて後作の中へ師匠がよの
 今にまじりしる帯のやとまじり
 法中へいれられたるものとす
 一 同の字のみの各歌より書通歌
 〜〜〜 中人の懐かやとくさ
 ぬけまじり

春日同詠早春霞

和歌

一 清覧又の園白庭の懐かしの書は
 くの路りて 但園白庭半書はよ

夏日 秋日は日無何也

一 季目のを治法は奇と以て年々
 〜〜〜 一 季目がたのハ 詠の字を奇
 此字はよ中字をとりて 詠がなり
 一 句題外の文字較多きハ 和奇と
 一 季の字のハ 詠の文字に 季をまてハ
 〜〜〜 一 季の字より 女ハ 詠
 又 一 季の字より 一 季の字を 詠字ハ 切
 局

現存の書は
 詠の字を
 詠の字を

冬日同詠一鳥詠

寒水和歌

大振名又初行此の字や和歌
歌の字下平字たびりくもく
〜

春日同詠廬山雨夜

草菴中和歌

るーこ下平字にきてふ者

一季日たりて題の文字にきりて
和歌の和歌といふ字にきりて
すゆへ題の文字に和歌の字
と問あもて〜

詠夏月

西三本かして一は詠

和歌

るーあ文字の字んをひて川
同くまー物字に憶あふ
初分此題の文字取も〜
やーた〜
一法衆の字なり神号の可開なる
〜

春日侍 住吉社詠寄松徒

和歌

一林本哀愁をた〜
時題字〜
よ〜
と歌字〜
我お〜

志ろくくしきふれは冬時を記す

一 假名取歌の懐かしの歌 経舟の
あそび

一 新言の歌 兼子の手 天子の奇

の字はあそびのうきうき普通の歌の字

言葉の祈の字とすの冷めぬ家

取とす流あれは是又ぬく

すへといふ 法皇御治世

伝わりしや

一 神社歌字のの陪の字の書

侍の字とくへ一陪は陪 伝洞や

書し歌字ののら二字とてはわづら

下流よりぬく 六国字とてあはれ

と 侍路加茂春日八幡太の太社

よはに歌字あそび 一とやに歌字よ及

お家の人し書書はねしといふ侍何

社といふ事とすし侍何よはれ字は

侍加茂社詠水石

又久和歌

ひき書

一 七夕詠七夕昇事

和歌

室陽詠菊盛

和歌

かきしむは海心又秋日詠七夕昇
事号とくく

假名取の二首とて此の時懐かしの
て思ひますとん

久日詠二首和歌
はるに

衣まき

なまき

なまき

志ろくしつしつり

一 旅名れ歌の憶

あそ

一 新言の歌れや

の字はしあそ

言篇の祈の字

取るとは流あれしとて又か

すへとて

流りしや

一 神社歌字のの陪の字の書

侍の字とて

書し歌字の流り

下流りか

侍流加茂春日八幡太の太社

よハ歌字あそ

お家の人し

社とて

侍加茂社歌水石

賢久和歌

り(書)

一 七夕歌七夕昂事

和歌

皇陽歌菊盛

和歌

かか

事等

三月二日詠撰華

和歌

五月廿日詠高蒲

和歌

上正瑞午と申すは言及

一 名守事官を人の官をよすし

権中納言源通村

前官の時の官をりら位をよすし

従二位藤原基時

あしに姓の字はふのさよりらふし
かきよあしにさ事ハ姓の字は

あしに墨を塗らるしこもりの
ほろくふらふらふらふらふら
の人れ位斗事ハゆのさし略ふ
まのさし

一 せ官の人の姓名をよすし

藤原時亮

一 海平藤原小の姓をよすし今もよす
の也れがれい唐子家の人の神砂子
てうぬるしたとくハ道原殿の若氏の
也れらよハ道原殿のさよハ若氏の
流の姓をのり代姓の人の神砂子
あつらふ也いおれ大老位がよの今
し同姓ハうりてハ林の表流のさハ
流の姓をよすし

一法中為しる友位わの倍ハ

律師明光

法印寛寛

又必かりきまじ凡倍ハ

沙門西伯

沙弥貞寂

是又必かりしき

一法所の位人位階わハ

法橋美安

そ位の人必かりし倍

一法乃まお初初の初ノ字と分

とのふまにまじハハ字をやり
てまかりハ平字ガハ長傷ハ
これと此定ノよーことハ又字教の
多かりりりて定めつー

一法ハ之初之字にまじ必九十九こ
と又字の教定めつー才ニ有ル
又字ニ字ニ字ニ初ヤハあけずは
句の又字ニ字初ヤハあけ
てまじ冷泉家ハ才ハ句必之初
ヤハあけて書し初之字の
假名の殺したといハ字又ニ字
あし又字とてニ字よまじ初
升家ハ又字ハ是ハ初の
中ハ初ハ初ハ初之字まじ

その殺おはぬる
くひととふりけてるを
やといまゝ、雪無あ
梨初、

大やうせき

一 必切まりの文字君を代受
よまひの百受けきよひしとて
「ちりよふか」といふ後白ぢりは
可飲無くるゝまゝ余ハ是
准すゝゝ

一 日月の二言ふふよゝてまゝ。

よーきれハ月いふまていゝ
勿論に位々の月の位はさ
とけのゝるハ修言しゆか
梅挑姫橋るゝのたひハ一
ゝー大やーまゝゝゝ
ゆゝハ切まゝゝゝゝ
とてけをゝ字あはゝゝゝ
切ゝと著ゝゝゝ
一 かり能あつゝたゝまゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝゝゝゝゝゝ
りゝたゝゝゝゝ

一 月日のよゝのせまよあま

とて 継とくしと紙にうつして其の
ひかりのあれた如くぬく
刃合せよと墨をこく
刃よりの指のく事 凡言(位)捕
つえとの中し 継のあつらん
一二のめ 懐紙よりせんすれ
れ書よりのこくしやよみ
うゝの事 継へ
一とぬたしとて 不のこく
んぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
字 漢字へ したくは 教の
くつく 喜ま ぶつ かく
うたふし

一 首 懐紙の 括弧 かの 假名文字

とす 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
額 かとす 括弧 文字 假名
すてし 括弧 よく 假名 括弧
よすてし 假名 括弧

一 下 の 明 の 括 弧 の 假 名 文字

とす 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
トとす 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
多 くの 假 名 文字 括 弧
お くの 假 名 文字 括 弧

一 下 の 括 弧 の 假 名 文字

とす 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
とす 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
とす 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

和厚と次

一 二首信紙守二行七字並に信紙
 一 一とそと一とそと我よまをそと
 首と一と何と一と七字と十と
 と紙及ふきつと一と一とす作十と
 一とと一と七字と一と一とす作れ
 古も唐一と一と一と一と一と一と一と
 及一と一と一と一と一と一と一と

詠二首和歌

和歌

夜郭と

いふ星れ爰のよるに
 こゝろんまゝの海に

山ほととぎすの

新道恋

川を流はれぬの海に
 うまの人れんまわら
 神のさくら

詠の字れ下の道より歌をまゝ。能
 保とてかゝりまけてことしつり

一 二首とて信紙の具はる物なれば
 聖長めまゝのものとす

一 六首とてその信紙はとそとよのか二行
 二行めまゝし歌はより紙の分よま
 分よ次の分よまの分よま
 分よの分よまの分よまの分よま

他日よりわろくもせぬ御海軍は
あつとがとわろくも喜ぶまふらじ

一 此方の書がのりも 喜ぶまふらじ

しやうやくの時佐右に
しやうやくの書はのりぬ多分
用ひしすまのまふらじ
つまはし平八つとわろくも
はす

中成の書はのりぬ多分
しやうやくの書はのり

あつとがとわろくも喜ぶまふらじ
あつとがとわろくも喜ぶまふらじ
あつとがとわろくも喜ぶまふらじ

一 此方の書はのりも喜ぶまふらじ
あつとがとわろくも喜ぶまふらじ
あつとがとわろくも喜ぶまふらじ

あつとがとわろくも喜ぶまふらじ

あつとがとわろくも喜ぶまふらじ

あつとがとわろくも喜ぶまふらじ

あつとがとわろくも喜ぶまふらじ
あつとがとわろくも喜ぶまふらじ
あつとがとわろくも喜ぶまふらじ

Blank paper strip at the top of the right page.

此日よりわろくもせぬ御海軍は
あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

一 中房の信也の御海軍は
あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

中房の信也の御海軍は
あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

一 中房の信也の御海軍は
あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

あつとせよとわろくもせぬ御海軍は

春もいそがしきわがふ

は梅乃花枝人の

よきよきよき

いそがしき雪はくさく

さくら花のこころ

のさか

は春のさかたれお

かひらうやにさか

か

か

詠草之事

一 詠草の目も春さ成りては

おのふゆ

一 詠草の詠草はあつるよう

花を丹家といふもあれは

よあはれ詠草の詠草は

お詠草よせせ

一 詠草の詠草

頓澄上

野亭挿衣

上ノ字の下の字は

一 春のあつるや風の吹く

かよきよき

秋の空のそら宿る

つせにらむる

春もして花のひれがふ
はく梅乃と花枝人の
よれよれとて

いふくも雪のつらき
むらぐれ月れのこと
て

のさか

はく河はよれがれお

かひらうやにさか

いふくもあか

詠草之事

一 後初原より奉書試の後かき

おぬ中後わん

一 望遠系は詠草はかきうら

飛舟舟家はいつもあれうら

くあは望遠系は後後とあ

は詠草とせ

一 望遠系に致うら

頓澄上

野亭接衣

上文字の下の言たるを

いほはあきそ糸石の北へ吹風を

かよとて秋の衣を

秋の聲たきれ宿とて

うきにはわらうきとて

奉書：初より後試のりれり中後
おぬ中後と云

望海堂の歌歌お申さるるは、
かまねらぬ海國の成るるの歌とて、
二そわりの事候し

一 望海堂の二歌七字

上の内は、
この内は、
この内は、
この内は、 望海堂

望海堂

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌
二歌をわけて、
二歌をわけて、

望海堂の歌

一 望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

一 望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

一 望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

望海堂の歌

たろくちのこし

一 女房の経冊はたそのけしゆり下ろしを
半字やうてま古書にのりてに目一

一 唯経人ののり

神祇	おぼえられけの位といふ まて	唯 于 六 拾
	まて まて 七の神位	
		相阿

けいひは経冊にちまをいふ白経人
とゆふ善通は打早しけいひは経人を
林れす所の経人し経人をまゆりまは

とゆふ善通は打早しけいひは経人を

手
分

けいひのけり
五

にゆりてのけりけのまてすま
まてのまてまてまてまてまて
まてまてまてのまて

神祇	おぼえられけの位といふ まて	相阿
	まて まて 七の神位	

一 古号経人の人限り法あつてもゆ

唯馬日月号を紙よはまてかて事

かれも経人よはまてかて事

まてまてまてまてまてまて

かりわら半字まてまてまて

名宗常の経人よおれ限りまて

まてまてまてまて

一 ろあふれ枝よけりハ経人のまて

かり他自派のまてまてまて

まてまてまてまてまてまて

まてまてまてまてまてまて

大あしちのし

一 女房の飛丹ひのたんはどりけりゆへ下のを以て
半字よりて古歌のしるしに白

一 暎やう籠かご入いれのし

神祇	<small>暎</small> 籠 <small>かご</small> 入 <small>いれ</small> の位 <small>ゐ</small> といふ	<small>暎</small> 籠 <small>かご</small> 入 <small>いれ</small>
	おほえれけの位 <small>ゐ</small> といふ	暎 <small>やう</small> 籠 <small>かご</small> 入 <small>いれ</small>

けいし暎籠かご入いれはしるしに白籠かご入いれ人
 との由ゆ普ふ通つうのし打うち早はやくけいし籠かご入いれを
 林はやし籠かご入いれの籠かご入いれ籠かご入いれを籠かご入いれのしを
 二しけのしるし書かき出だしけのけりお
 に似にて下のけのしるしすま
 とはけのしるしはしるしすま
 すましるしるし

神祇	おほえれけの位 <small>ゐ</small> といふ	暎 <small>やう</small>
	暎 <small>やう</small> 籠 <small>かご</small> 入 <small>いれ</small>	暎 <small>やう</small>

一 古歌籠かご入いれはしるしを以て

暎やう馬うまの月つき号ごうを籠かご入いれはしるしに
 かれし籠かご入いれはしるしに
 おほえれけの位ゐといふ
 かりわら半字はんじを以てしるしに
 名な常じょうの籠かご入いれはしるしに
 しのを以てしるしに

一 しるしに籠かご入いれを以てしるしに

一 名なあはれけりしるしに籠かご入いれの字あを以てしるしに
 かりしるしに籠かご入いれの字あを以てしるしに
 かりしるしに籠かご入いれの字あを以てしるしに

極人さつらにおめしきまのいひ
歌如列の題をわす

一 小鏡人の長れぬまれ代へちぬ
白鏡人しすやいひらま

一 多岐すやいひらま

撰集并物河本の事

一 撰集ハ九の十の事の叙しと叙の
表の注しりやいひし不説ハ注し
押し

一 物河ハ九の叙注しと叙の表
のこらめのさしり書叙し不説ハ注し
押し

一 版のこらめさしり書叙し不説ハ注し
押し

次の版河平ハ三れ五れすす今ハ一
方より別さしり言くする事

一 此句ハ聖徳王のさしり書叙し
しりす家也又事ハさしり

一 河路也注しとさしりて不説ハ注
の注しと中ハさしりて撰集に同
一 不説の事

古今和歌集 上
古今和歌集 上

不説ハのさしり書叙しと叙の表
ハさしり書叙しと叙の表
申すし家也又事ハさしり

平石の平紙は行をく

右一冊は持明院家入札
之秘傳也 御門外不
ふたをゆえに也

這一冊ハ基時口傳授之圖書
連阿基雄ヨリ傳授之紙
ッハ一軸ヲ潤色也 別卷
アリ大旨同シナニ加筆之介
次下ニ授書之

基雄口傳
授書

一 懐紙又ハ書札紙守用ノ紙分
ハ糸紙織陳座ノ物とワケ
凡ク吹立ニレ々ノ糸ノ端を
ト至菊ノ幅ニ寸程有ク地
ナリ
一 懐紙の強作の日乃字ニハ
近世時宜ヨリテ糸書事
一 懐紙の糸サレ明テ
人知事ニハ

私之神社奉納ノヒモ
糸書ニハハ活キホテ好シ

一 勅頭又ハ人ハ
年若書換
中人目ヨリ

源 昔々八二斤の内のはこぼし

かりと短尺を指入しては海軍

保ふとも同等の短尺をいふと

まゝとて中後一の短尺をいふ

海軍をいふ

星 二七 二七 七七 七七

海軍

名ハ極大極小ハわかぬ

一 尺短尺八寸の質は長尺を備

りて寸と尺をいふ一尺八寸

お浪の布川の所の質は長尺を備

りて尺をいふ一尺八寸

わの世といふは尺の質は長尺を備

りて尺をいふ一尺八寸

わの世といふは尺の質は長尺を備

一 尺短尺八寸の質は長尺を備

りて寸と尺をいふ一尺八寸

お浪の布川の所の質は長尺を備

りて尺をいふ一尺八寸

一 尺短尺八寸の質は長尺を備

りて寸と尺をいふ一尺八寸

一 尺短尺八寸の質は長尺を備

りて寸と尺をいふ一尺八寸

わの世といふは尺の質は長尺を備

一 尺短尺八寸の質は長尺を備

一 尺短尺八寸の質は長尺を備

りて寸と尺をいふ一尺八寸

わの世といふは尺の質は長尺を備

一 奇仙 六宮仙 八葉何とて巻を以らり奇
此ハ奇常のうらしし花多くまをり
うらら〜ハ押さふら

一 奇人形のうらのうらのうらのうらのうら
こしや〜ハ押さふら

一 奇形のうらのうらのうらのうらのうら
（こしや〜ハ押さふら）

一 奇形のうらのうらのうらのうらのうら
わ〜ハ押さふら

一 奇形のうらのうらのうらのうらのうら
こしや〜ハ押さふら

一 奇形のうらのうらのうらのうらのうら
こしや〜ハ押さふら

一 奇形のうらのうらのうらのうらのうら
こしや〜ハ押さふら

一 奇形のうらのうらのうらのうらのうら
こしや〜ハ押さふら

秋日同詠雨後草花

和歌

あらしに又は花をば
るゝ高むらさき先秋
やしもとくく庭を
萩波野

二二 懐仙堂 同日同字をくしたは

詠松風入夜琴

和歌

おとの音に家此る
初めせつとあし
進乃をさるる酒
先字草

冬白田詠二首和歌

時雨 詠らば

ねめらまてよまのし雨の
きこひまてくまふふゆを
なしてふさふさなる

閑居 詠らば

さゆらよれまふれは
いとまにゆきまらるる
あつれふらなり

こゝかしつこりしつて
まのつとむる

色紙

今日 不知

誰 社 會

春風 長 水

一時 来

「行彦セバキマリ」

之部 寺いかに
ふえをよ

みうら

山もうみ

いふふいふ

石 橋本八磨

不能く少くありのう

能くあきまりむ

物つられゆく

しるあま

名 紀世之

いさよ あつこ

われ志はく し

あこる あ

わら

井の

天智天皇

秋を田代より内蔵の庵のまをりし
神奈川のあまのわら

持統天皇

まこと 麦早くまじり
夜ほきてみわりのこ

柿千代

あまのこころのほろり
うらみ 長瀬橋より

田子 あまのこころのほろり

あまのこころのほろり あまのこころのほろり

あまのこころのほろり あまのこころのほろり

安侯

天乃 天乃 天乃

仲凡

あまのこころのほろり

小野

あまのこころのほろり

源家朝臣 山里くをそふとあしきけり
人見しなりいれぬやそか

あつた けい
くわい けい
くわい けい
くわい けい

有の志 けい
けい けい
けい けい

物行 けい
けい けい
けい けい

春乃 けい
けい けい
けい けい

列樹 けい
けい けい
けい けい

紀 けい
けい けい
けい けい

風 けい
けい けい
けい けい

人 けい
けい けい
けい けい

手書に文を相康 けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

あつた けい
あつた けい
あつた けい

道用

さへしそし余の
法師 ありあけしそし
今とあへ海やうり

白入

世申と道 白入 くらき
そは成 くらきけり 山の奥庭 ねんそん

友原清

たけの文 思く先 世そん
浦相后 このふ波や じとく 三つふ

俊忠

あふらう 四やうぬ くらき
法作 物にふは ねんそん けりけり

西行

月や くらき
法師の言 くらき くらき くらき

寂蓮

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

空海

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

玉の松

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

後を指す
くらき くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

くらき

くらき くらき
くらき くらき くらき くらき

順徳院

此のやうにあらむ一やう
百のやうなるのよはのよは

いふまゝ
いふまゝ
いふまゝ

申言

いふまゝ
いふまゝ

<p>いふまゝ いふまゝ いふまゝ</p>	<p>申言</p>	<p>いふまゝ いふまゝ</p>						<p>順徳院 此のやうにあらむ一やう 百のやうなるのよはのよは</p>
-------------------------------	-----------	----------------------	--	--	--	--	--	---

ふ

か
か
か

か
か
か

か
か
か

か
か
か

か
か
か

か
か
か

か
か
か

か
か
か

か
か
か

か
か
か

<p>か か か</p>	<p>か か か</p>	<p>か か か</p>	<p>か か か</p>	<p>か か か</p>	<p>か か か</p>	<p>か か か</p>
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

1.

1.

同
字

一	向	養 老 堂	一	み ゆ	あ と
一 二 三	心 乃 山 路		一 乃	あ ぬ	あ ら い へ

